

聖マリア国際協力ニュース

第 8 9 号

平成 2 0 年 1 月 1 日 発行

韓国カトリックメディカルセンター見学記

放射線科 荒木昭輝



歓迎式の模様

12月12日からの3日間、韓国カトリック医療協会関連施設見学に井手理事長以下、島副院長、立花経営企画室長、丸山経営企画室統計作成チームリーダーと私の5名が参加しました。

同協会では来年年末竣工予定の新病院を建築中で、また電子カルテシステムの稼働を準備中であり、新病棟建築と情報システム強化を計画している当院にとって大変に参考とするべく、今回の見学が計画されました。

ただし残念なことに、当院側の窓口として同協会との連絡等でこれまで活躍してこられた高橋修司さんが直前になって急逝されました。初日の午後19時頃を過ぎ、夕方ソウルに着いてホテルに入った後、協会のメンバーの方々に歓迎の宴を設けて頂いたのですが、その席上で井手理事長から報告があり、参加者一同で高橋さんのご冥福を祈りました。さらに、協会の配慮により翌朝ソウル聖母病院で急遽ミサが開かれることとなり、この見学のために葬儀に参加出来なかった我々は異国の地から高橋さんに別れを告げることが出来ました。

それからの一日は非常にハードで、まず聖母病院の新病院の建築計画の説明、データセンターの見学、昼食後に電子カルテプロジェクトの説明、新病

院工事現場の見学とぎっしりのスケジュールをこなしました。夕食後ホテルに向かうマイクロバスがソウル名物の渋滞に遭っている間、ほとんど全員が爆睡状態でした。

病院建築も電子カルテプロジェクトも非常にスケールの大きな計画であり、病院の規模は当院計画の6倍あります(地上22階地下6階!)。電子カルテプロジェクトは聖母病院だけでなく、韓国カトリック医療協会の8病院が共同でデータセンターを作り、そこに医学会計、オーダリング、電子カルテなどほとんどのシステムを集約し、専用回線で8病院と繋いで、開発委員やハードの集約で数十億円の経費節減を狙ったもので、正直最初は驚くばかりでしたが、細かな話を聞く共通する課題も多く、参考にするべき点も多いと感じました。

三日目は今後の共同プロジェクトの進め方について打合せを行い、昼前には飛行場に移動し、お土産を買って時間もなく飛び乗って福岡に向かう慌ただしさでした。情報システムについては共同ワーキンググループを作って技術協力などについての検討を行うこととなり、先方のメンバーと再会を約束して別れてきました。今後の展開が楽しみです。



新病院の建築工事現場にて

パキスタン国結核対策事業 喀痰塗抹検査の質の改善に協力して 国際協力部 山崎裕章

当ニュース80号で「JICAパキスタン国結核対策向上プロジェクトでの検査にかかる活動の「目標」と「活動内容」を報告しました。今回は、実施した活動の「結果」つまり目標である「検査の質の改善」がどの程度なされているかについて報告します。

活動の結果を確認することは、目標達成に対して実施した活動が妥当であったかどうかを見るものです。つまり結果が出ていれば活動は妥当と判断されます。

プロジェクトで導入した質の改善の確認方法は、WHO(世界保健機構)でも推奨され、多くの途上国の結核対策で用いられている「外部精度管理(EQA)」です。このEQAでの確認内容は、標本を作製する技術(6項目評価;サイズ、厚さ、染色性、均一性、検体の質、汚れ)顕微鏡での標本を見る技術(エラー:陽性を陰性、陰性を陽性と判定)の2つです。この標本は、結核診断センター検査室の検査技師が作成したものです。これらの標本は、EQAを実施している検査室に運ばれ、そこで専門の検査技師により再検査と評価が行われます。このEQAを用いて、プロジェクトの支援県(11検査室)での活動の結果を確認しました。エラー(%)が低い方が良い評価)では、2006年の活動開始時平均6.5%と「陽性を陰性」、「陰性を陽性」と判定し報告

した例が多く確認されましたが、2007年9月では平均2.0%まで下がっていました。また標本の6項目の評価(%が高い方が良い評価)では、活動開始時平均30%と非常に粗末な標本(薄い・厚い、大きい・小さい、薄い・濃い、汚い)を作成していましたが、2007年9月には80%と見やすい標本を作製してました。尚、ここで述べた数値的な結果は、PDMの指標として求められているものでなく、活動の結果と国際的な基準(特に6項目が全て80%以上)にどの程度近づいているかを確認する目的で個別に作成しました。

結論として、活動の結果は顕著に現れ、また国際基準にもほぼ到達したことが確認されました。このことから、活動は目標に対して妥当であったという事が判明しました。



粗雑で見にくい標本



技術研修と巡回指導の結果、綺麗で見やすくなった

ISAPHラオスプロジェクトの視察を終えて

ISAPH事務局 磯東一郎



郡保健局長より贈物をいただく

聖マリア病院のご支援により特定非営利活動法人ISAPHも今年で3年を迎えました。ISAPHの活動の中心は、ラオス国カムアン県におけるコミュニティーを対象とした母子保健プロジェクトで、来年は新たな展開を目指し

新プロジェクトの立上げの時期を迎えます。この度、新プロジェクトの立上げ準備に関わる諸機関との調整とプロジェクトの視察のため、小早川ISAPH理事長に同行しラオスに出張しました。首都ビエンチャンでは、当ISAPHの次期プロジェクトの宣伝も兼ねた支援依頼のため、JICAラオス事務所関係者との会合、日本大使表敬、ラオス保健省高官との打合せなどを行い、その後は、プロジェクトの活動地域であるカムアン県に入りました。県・郡保健局職員との次期プロジェクトの打合せ、モバイルクリニック活動の視察、NGO機関や国際援助機関で活動している日本人との意見交換、更にプロジェクト内部での業務調整と朝から晩まで盛り沢山なスケジュールでしたが、その分収穫も多くありました。日本で頭を



モバイルクリニックに集まった住民

描いていたプロジェクトの様子がより立体的に見えるように、度々現地側との意見に齟齬を来たした原因も理解できたように思います。また、モバイルクリニックの視察では、ISAPHスタッフと郡保健局のカウンターパートの活動に多く参

加するにこやかな母親の姿から、これまでの努力で築かれた信頼関係を肌で感じることができました。

そしてもう一つ嬉しい事がありました。同地区において多発していた乳児死亡でビタミンB1欠乏症が疑われ、聖マリア病院国際協力部の協力の下ビタミンB1の調査を昨年11月に実施したのですが、その調査結果の中で、ビタミンB1の数値が異常に低い乳児があり、調査を担当した国際協力部の中野先生からの指示で、ISAPHスタッフが、その子どもの家に様子を見に行きました。その子は、ビタミンB1欠乏のみならず骨と皮ばかりの重度な低栄養状態に陥っており、即、郡病院に運び治療を行いました。その後、辛うじて命は取り留めたとの報告を受けていたのですが、その親子が今回のモバイルクリニック活動の発育健診に元気に参加していたのです。その親子を紹介され、挨拶を交わした時のお母さんの笑顔が今も忘れられません。子供は前の状態が想像できないくらい健康に育っており、その親子の姿をみて、ISAPHの存在意義を強く感じる事ができました。これからも、一人でも多くの人々の笑顔のために頑張りたいと思います。



元気になった子供

国際協力活動広報のための掲示板設置

去る12月21日、当院が行っている国際協力・国際交流活動に関する情報を職員の皆様へお知らせする目的で、院内掲示板を1診2階のギャラリー(保健指導センター入口前)に設置しました。朝の連絡会や大ホール・指導室で行われる委員会等に出席されている方は既に目にされていることと思いますが、未見で国際協力に関心をお持ちの方はぜひ一度ギャラリーまで足をお運びいただければ幸いです。

掲示内容は「JICA集団研修」および「韓国カトリック医療協会(CMC)との交流」を中心に、「国際協力ニュース」の紙面だけではお伝えしきれない情報をわかりやすく掲示していく予定です。また国際協力に関するセミナーや研修員との



ギャラリーに設置された掲示板

交流会などを開催する際には、この掲示板を通じて皆様へご案内をいたします。

昨年実施した職員アンケートでは「聖マリア病院が行っている国際協力活動について、もっとよく知りたい」という声が多く寄せられていました。これらの声に応えて、国際医療協力についてより良く理解するうえでの一助となるよう、今後、この掲示板による情報発信に努めていきたいと考えております。

今月の動き

- 【受入】
 - 1月10日(木) 韓国釜山カトリック大学校教職員他17名が病院見学
 - 1月21日(月)~2月15日(金) JICA南東欧地域病院運営コース研修 ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニアより6名が研修